公益財団法人大林財団

研究助成実施報告書

助成実施年度	2019 年度
研究課題（タイトル）	千葉県に残る特異な形態の本堂内宮殿（厨子）に関する建築史的研究
研究者名※	上野 勝久
所属組織※	東京藝術大学 美術研究科 教授 （東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻）
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	150 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（　）は、報告書提出時所属先。

（研究報告-様式 2）

大林財団２０１９年度研究助成実施報告書

所属機関名　東京藝術大学
申請者氏名　上野勝久

研究課題	千葉県に残る特異な形態の本堂内宮殿（厨子）に関する建築史的研究

（概要）※最大 10 行まで

大山寺は、千葉県鴨川市に所在する真言宗寺院である。

大山寺不動堂は、令和２年度の調査により元禄 12 年(1699)と推測できる箇所が確認でき、宮殿の建築年代を元禄 12 年とする確立は極めて高いと考えられる。

大山寺宮殿は、不動堂の建立年代の享和 2 年よりもはやい建立年代が明らかとなった。これは、不動堂の前身堂(天正 14 年(1586)建立(「大山寺不動堂棟札」(個人蔵)より))に現在の宮殿が建設された後、現在の不動堂(享和 2 年)が、覆屋のように建設されたと推定している。

また、宮殿のみで建築形態が完結している点からも、前身の仏堂の一部を再利用してつくられたという通常と異なる形成過程の可能性が理解できる。つまり、壮大な宮殿を包み込む覆屋のように、現在の不動堂が建設されたと考えられる。

１．研究の目的　（注）必要なページ数をご使用ください。

近世社寺建築の全国的調査は平成前期に一段落し、この 30 年間にはそれらの研究も着実に進んできたが、地域性や多様性が顕著なため、現状はさらなる個別研究が求められている。大山寺本堂内宮殿（以下、大山寺宮殿）および那古寺観音堂内宮殿（以下、那古寺宮殿）の２件は、千葉県の南部地域に存在している本堂内の宮殿（厨子）で、国宝・重要文化財建造物の宮殿・厨子（全１７件）と比較しても、他に類のない特異な形態を有していることが明らかである。しかし、これまで一部の有識者を除いて知られておらず、その建築的価値と文化財価値を広く共有する必要がある。大山寺宮殿および那古寺宮殿は、近接して所在する上、同様の形態を有することから、顕著な地域性や文化の伝播の因果関係が想定される。その立地と構成から、房総半島の庶民信仰として発展した山岳信仰の影響も考えられ、近世の建築史に新基軸を示せると考えられる。

そこで本研究は、まず大山寺宮殿の建築的価値および文化財価値を明らかにし、建築史学上の価値を示すことを目的として調査・研究を進めた。

２．研究の経過　（注）必要なページ数をご使用ください。

①大山寺と不動堂の概要

大山寺は、千葉県鴨川市に所在する真言宗寺院であり、太平洋を臨む外房の鴨川市街と東京湾を臨む保田市街を結ぶ長狭街道のほぼ中間の丘陵地の大山に所在している。神亀元年（724）に良弁僧正を開基として創建されたという伝承があるが、詳しいことはわからない。そもそも大山の頂上には高蔵神社が鎮座しており、大山寺は近世までその別当寺であった。不動堂の本尊であ

る木造の不動明王坐像及び両脇士像（県指定文化財）は様式から鎌倉時代中期の作と考えられている。また建武5年（1338）の土地の寄進に関する文書をはじめとする13点の中世文書（県指定文化財）が現存していることから、中世においては地域における有力な寺院であったと推察される。中世の変遷は詳しくわからないが、天正14年(1586)の「大山寺不動堂棟札」（個人蔵）があることから、現在の不動堂の前身堂があったことが明らかで、大工は山田藤五良であった。

境内は大山の中腹に構え、東西に細長い平坦地には不動堂（千葉県指定文化財）と鐘楼（鴨川市指定文化財）、一段下がったところに仁王門（鴨川市指定文化財）の近世建築が並んでいる。現存する不動堂は、「大山寺不動堂棟札」（鴨川市指定文化財）より享和2年の建築であることが明らかである。供養導師は大山寺37世権大僧都法印榮充、大工棟梁は平郡本織村（現三芳村）の伊丹喜内英俊と長狭郡大桑村（現鴨川市）の畠山喜右衛門安國であった。

東を正面とする不動堂は、桁行5間（12.8m）、梁間5間（12.8m）、正面向拝1間付で、四周に擬宝珠高欄付切目縁を廻している。屋根は入母屋造、銅板葺、向拝に軒唐破風を設け、妻飾は二重虹梁大瓶束で、破風拝みに鰭付三花懸魚をつける。屋根は昭和37年まで茅葺であった。

平面は梁間前方の5間に2間を外陣、梁間後方中央の3間に3間を内陣とし、格子戸で厳重に区画している。内陣の両側は3間に1間の脇陣とし、内陣との境を開放、外陣との境には引き違い板戸を入れる。床は外陣・内陣・脇陣とも板敷である。天井は四周の入側1間通りを化粧屋根裏とし、外陣の内陣寄りを鏡天井、内陣を格天井とする。

軸部は、すべて礎石建の円柱で、長押・貫・虹梁で固めて頂部に台輪を廻らす。側廻りは、組物を二重尾垂木付の三手先、中備を蟇股とし、軒を二軒繁垂木とする。内部の内陣廻りは、出組で天井桁を受ける。柱間装置は、両折桟唐戸、連子窓を配し、壁は横板張とする。正面の一間向拝は几帳面取角柱を立てて、虹梁形頭貫でつなぎ、獅子鼻、象鼻をつける。屋根は地垂木を打越垂木として前に延ばして二軒とし、中央には軒唐破風を設ける。柱上には左右に伸びる連斗を組み、中備には豪放な龍彫物を入れ、四丁の彫物手挟を組んでいる。内部の架構をみると、内陣は背面入側通り中央の柱2本を省略して桁行に大虹梁を渡し、これに内外陣境の柱から大虹梁上の大瓶束に梁間方向の大虹梁を架ける。外陣は、入側通りの柱２本を二重虹梁で省略している。本堂の柱はいずれも立ちの高いものとなっており、床高は内陣と外陣で同じであるが、内陣の格天井は外陣の鏡天井より約1.4尺高く、床面から格天井まで約21.2尺（6. 41m）である。内陣や外陣の架構とともに、大規模な宮殿を前提とした高さと考えられる。

現在の不動堂は享和2年に建てられているが、17世紀から18世紀にかけて、特に大山寺が火災や自然災害にあった記録や伝承がない。また、棟札にも経緯にかかる特段の記述がなく、享和2年の再建の理由は明確ではない。そこで天正14年に建てられた仏堂を前身堂とみるならば、享和2年までの間に、およそ216年が経過している。文化財建造物の修理周期の通例で考えれば、天正14年の仏堂はかなり破損や変形等が進み、大規模な修理等が必要な時期に至っていたと判断できる。つまり前身の仏堂が相当に老朽化したため、現在の不動堂が再建されたと推察される。

確かに、千葉県有形文化財の指定時の説明では、不動堂は「天正14年に再興されたものを、216年後の享和2年に改めて再興したもの」としている。しかし、その後の経緯として「来迎柱を宮殿内部に取り込んだ形で須弥壇廻りの改修を行っている。」と記している。要するに、内陣にある宮殿及び須弥壇は享和2年以降のものと判断している。

指定時の平面図をみると、宮殿内部には2本の円柱が背面入側通り柱筋に描かれている。しか

し、背面入側通り柱筋に揃うのは宮殿背面の柱筋であり、この2本の円柱は背面入側通り柱筋より902mm（約3尺）前方に位置している。また、柱間間隔をみると、2本の円柱は芯々で2963mm（9.78尺）であるが、不動堂の桁行中央間は芯々で3490mm（11.52尺）であって、揃っていない。しかも後述のように、この2本の円柱は現在の不動堂の軸部と連結しているところがなく、完全に独立して立っている。つまり、この2本の円柱は現在の不動堂の来迎柱と考えられず、この宮殿及び須弥壇が享和2年以降の改造とは思われない。部材や壁面に流麗な彫物が多用されているが、渦文や木瓜文などの絵様繰型は不動堂のものと形状や彫方で大きく異なり、不動堂より年代が遡ることを示唆している。これらを踏まえ、つぎに大山寺宮殿の構造と形式を詳しく分析する。

②大山寺宮殿の形式と構造

大山寺宮殿は、不動堂内陣の中央背面寄りに配置されている。規模は正面3間、側面2間で、正面1間通りを吹放しとし、背面中央間の1間を縁の出の大きさに突出する。宮殿が載る須弥壇は四周を縁状に廻し、正側面の三方に禅宗様高欄、両側面後方には脇障子を設けている。須弥壇は三段構成になっており、下段は刳型の框を積み上げ、中段は太鼓張り状の束を立ててその間に彫刻を入れ、上段は彫刻拳鼻付きの三手先腰組としている。

側廻りは正面入側通りの中央に両開き三ツ折桟唐戸、背面中央張り出しに両開き板扉を入れるが、ほかは板壁とする。屋根は二重で、上重の切妻造屋根は正面中央に千鳥破風を設ける。下重の屋根は四隅に隅木を入れて隅棟を降ろし、正面と両側面に軒唐破風を付け、特に正面軒唐破風先端の鬼板には鳳凰の彫刻を載せる。上重、下重とも木瓦棒板葺で、軒は二軒繁垂木である。

下重は、円柱で長押、頭貫で固めた軸部に台輪を廻し、二重尾垂木付の三手先組物の詰組とする。上重は下重屋根の上端の位置に土居を据えて、拳鼻付きの出組の詰組とする。上重の妻飾は虹梁・太瓶束架構で、正面・背面と同じ出組の詰組で受ける。

この宮殿の構造形式について、これまでの通例に倣って表記するならば、「宮殿及び須弥壇　桁行3間、梁間2間、背面中央部1間張り出し、四周須弥壇付、二重、上重切妻造、正面千鳥破風付、下重正面及び両側面軒唐破風付、木瓦棒板葺」ということになる。これを国宝重要文化財建造物と照合してみると、合致するようなもの、同じようなものを見出すことができない。つまり、大山寺宮殿は、従来の文化財建造物に類例のない特異な構造形式ということになる。

通常、本尊を安置する宮殿や厨子という建築は、内陣の床上に須弥壇をつくり、その上に安置される建築もしくは箱型のものが一般的である。大山寺宮殿は、後方の3間に2間及び張り出し部の柱を須弥壇上板のところで足元長押で固めているが、前面の吹放しの柱四本は須弥壇上板に直接立てている。確かに、内陣床上に置かれた須弥壇に載っているように見えるが、須弥壇上板に柱をそのまま立てるのは無理がある。つまり、宮殿の柱は須弥壇上部に載っているのではなく、須弥壇上板を貫通して、下に延びている。

さらに、宮殿内部には側廻りの柱よりはるかに太い直径約400mm（1.32尺）の円柱2本が芯々柱間2963mm（9.78尺）で左右に独立して立っている。梁間方向の立ち位置をみると、宮殿梁間のちょうど中央になっており、正面側の入側通りにかなり寄っている。

そこで、宮殿の構造をみてみると、宮殿内部の太い2本の円柱は礎石建の通し柱であって、須弥壇上板と格天井を貫通して、上重の組物と屋根を支えている。その周囲は地盤面に基礎・土台を廻し、柱や束を立てて軸組をつくり、柱が須弥壇上板を貫通して、下重の組物と屋根を支えている。さらに須弥壇は下段の刳板を受ける材や上段の腰組を、周囲に廻した土台に立てた束に挿

し込んで、組み立てられている。

このように、宮殿及び須弥壇は内部に立つ2本の円柱からなる骨格部、その2本の円柱を囲むようにしてつくられた外殻部、さらにその下部を取り巻く須弥壇部という、3つの構造体で形成されていることが判明した。現在の不動堂との関係をみると、不動堂内陣の床組である大引と根太及び床板は、須弥壇の最下段の框辺りまでしかつくられていない。また、2本の太い円柱を繋ぐ足固貫と、それと直交する大引は、須弥壇最下部の框あたりで切断されていて、不動堂の床組と繋がっていない。つまり、宮殿と須弥壇は不動堂本体と分離独立した構造体になっている。

これらのことから、宮殿の骨格となる2本の太い円柱は、現在の不動堂の一部、来迎柱に相当するものとは考えられない。また、宮殿及び須弥壇は、享和2年に現在の不動堂が建てられた後に、一部を改造してつくられたものとも考えがたい。むしろ、宮殿及び須弥壇があることを前提として、現在の不動堂がつくられたと判断するべきであろう。

宮殿正面の吹き放し柱の中央2本には、一対の聯が掛けられている。聯が当たる柱の表面は他の柱と同じように塗装の劣化が見られるので、この聯自体は後世に掛けられたとみられる。聯の裏面には「旹明和八歳次辛卯／極月吉祥日　大山寺三十四世住／法印栄周／三王院住／良□」（／は改行）とあるから、宮殿は明和8年（1771）以前の建築と考えて良い。そこで、宮殿の成立過程を検証する。

④大山寺宮殿の成立過程

まず、宮殿の骨格となる2本の太い円柱がいつのものかを検討したい。2本の通柱は須弥壇天板と宮殿天井を貫通して立ち上がり、上重の屋根を直接受けるという架構で、この周囲に下重の屋根が設けられていることが判明した。

この2本の円柱は、直径約400mm（1.32尺）、全長5142mm（16.97尺）、最下部の約1061mm（3.50尺）が八角形断面、それより上は円形断面で、杉材とみられる。礎石建で、現在は足固貫、飛貫、頭貫を通し、頂部には台輪を載せている。足固貫の下には前後に大引が入れられているが、根太はなく、先端で須弥壇の框を受ける程度である。また、足固貫と飛貫の間の腰と内法の位置には枘穴があって、もともとは腰貫と内法貫が通っていたとわかる。用材、太さや長さからみて、現在の不動堂と合わず、別の仏堂のものと判断される。

円柱を固めている部材をみると、台輪と頭貫は上重の切妻造屋根の妻飾より外側に出た位置で、鋸で切断された木口を露出している。飛貫は下重の小屋内にあるので、その先端の位置と仕上げが確認できないが、足固貫は大引と同じように須弥壇の最下段の框より外側の位置で、やはり鋸で切断された木口を見せている。

内法貫と思われる枘穴は、円柱を繋ぐ方向だけでなく、それと直交するように枘穴があり、正面側は小根枘になっている。腰貫のものと思われる枘穴も、背面側にだけ直交する枘穴がある。さらに、腰貫のものと思われる枘穴と足固貫の間には、南面・北面ともに板溝と胴縁の痕跡に埋木が施されている。これに対し、内法貫のものと思われる枘穴と腰貫のものと思われる枘穴の間は、柱向き合い面に何の痕跡もないが、その反対の面と背面側の面には板溝と胴縁の痕跡が残る。

台輪の上部を見ると、ここには小屋組らしいものはつくられていない。大斗を据えてまず三斗を組み、柱筋には通肘木を通し、前後には三斗を組む。それらの上に巻斗を置いて、柱筋と前後の同じ最上部の位置に3本の通肘木を通している。この3本の通肘木はほぼ同寸法の矩形断面で、天端を蒲鉾型の厚い板で繋ぎ、その上を薄い板で覆って棟をかたちづくっている。両側の妻面に

は上部に峯をつけた棟木が破風板の拝みに取り付いているが、これは柱筋の最上部中央の通肘木を突出したものであり、両側の妻飾の間には実質的に棟木がないことになる。

つまり、台輪から棟の間には組物が組まれているのである。太い円柱を繋いでいる頭貫と台輪、飛貫を考え合わせると、これらは現在の不動堂と異なる仏堂の一部であったことが明らかである。このように、宮殿は内部の太い円柱による軸部とその上の組物、つまり何らかの仏堂を前提とした構造になる。円柱に残された内法貫、腰貫と見られる枘穴、板溝と胴縁の痕跡から、2本の円柱は仏堂背面の入側通り中央間と判断され、腰貫・内法貫の間には壁がなく、反対の両側及び背面側と腰貫以下が縦板壁であったと推測される。この部分は奥へ仏龕状に突出した厨子で、正面である内陣側に扉を構え、本尊である不動明王坐像と両脇侍を安置していたと考えてよい。

この宮殿の骨格部は、前提となった仏堂の一部である台輪、頭貫、（飛貫）、足固貫、大引がその端部を切断されており、軸部から組物まで組まれた状態で再利用されたと考えるべきである。連結する部材を切り離したのは位置を動かすためで、内陣側（前方）に移したのであろう。その上で、骨格部を取り囲むとともに上重の切妻造屋根を支承する外殻部と、須弥壇部がつくられたと考えられる。骨格部を構成する柱や各貫、組物の部材の太さや仕上げなどをみると、これらは前身の不動堂、つまり天正14年に建てられた不動堂の一部と考えてよいと思われる。

このようにみると、宮殿はこれだけ充実した規模と形式を有するつくりでありながら、箱棟などの大棟がつくられていないことも理解できる。つまり、前身の堂の天井は、現在の不動堂よりも低かったため、大棟を設けることが困難だったのであろう。そのため、上重の正面側は棟の手前に堰板を設け、屋根面の勾配を急にすることで、大棟のある部分を隠すように対処したと判断される。宮殿が前身の堂の一部を骨格にしてつくられたことの傍証になると思われる。

大山寺宮殿の珍しい建築的特徴としては、宮殿のみで建築形態が完結している点があげられるが、このように前身の仏堂の一部を再利用してつくられたという通常と異なる形成過程によるものだろう。さらに立派な宮殿を囲み込む覆屋のように、現在の不動堂が建設されたと考えられる。

⑤大山寺宮殿の部材墨書

前述の通り、千葉県有形文化財の指定説明では、現在の大山寺宮殿及び須弥壇は享和2年以降のものと判断されている。大山寺宮殿の構造体は、天正14年に建てられた前身の仏堂の一部を再利用して建設され、さらに宮殿を囲み込む覆屋のように現在の不動堂が建設されたと考えられる。この建設過程から推定すると、宮殿の建立年代は享和２年を遡ると推察される。

令和２年度の実地調査では、下重柱に組まれた組物の通肘木２ヶ所に墨書を発見した。墨書が記された通肘木は、それぞれ、①本尊を安置する宮殿内部中央の南面、と②宮殿内部南側面である。いずれも、三手先組物の大斗芯にある壁付きの通肘木であり、通肘木と巻斗の組み方、および墨書の文字の重なりから、宮殿の建設時でないと書き込みが不可能な位置である。墨書は、所々で巻斗が組まれていて見え隠れの文字が多かったものの、確認できた文字は次の通りである。

墨書①中央南面の墨書「房州長狭大山　不動寶殿　彩色」

墨書②側面の墨書　　「此御(営)□～□儿(元)彔(禄)十二極月□～□彩色」

まず、①の墨書によると、大山不動堂の「寶殿」の彩色を行ったことが明らかであるが、ここで着目すべきは、宮殿を「寶殿」と称すことである。厨子や宮殿ではなく「寶殿」と表現することから、宝物（本尊）を守る施設を強く意識していたと考えられる。さらに、現在の不動堂の規模に対して、宮殿が壮大な規模で建設されていることからも、「寶殿」としての格式が伺える。

そして、②は宮殿の建立年代を推定できる墨書と考えられる。墨書の書出しは「此御営」と読め、営造または営繕と続くと考えられる。次に巻斗による見え隠れを挟み、中央部分は「元禄十二極月」と判断できる。ただし「元禄」の各文字のうち、「元」は冠が巻斗に重なり確認できないものの、脚が「儿」と読める。「禄」は、偏が巻斗に重なり確認できないが、旁は筆の流れから「彔」と判定できる。これにより、元禄年間が「十二」以上の年が存在する（元禄 17 年 3 月まで）ことを併せて、元禄 12 年(1699)と解釈した。ただし、通例の年号の書式ならば、年代の次に干支を入れことが多いが、今回の墨書では年号の次にそのまま月を記している。古文書でも稀に、干支が記されない事例もあるので、今回は省略型と考えられる。

以上のことから、大山寺宮殿（宝殿）の建立年代は、元禄 12 年(1699)12 月と推定される。

３．研究の成果　　（注）必要なページ数をご使用ください。

得られた知見より、２０２１年９月の日本建築学会の大会で２本の口頭発表が決定済。
２０２１年末頃に、日本建築学会口頭発表の成果をもとに、千葉県鴨川市内にて大山寺宮殿の調査研究成果の発表会を予定。２０２３年度中に、日本建築学会の査読論文を２編執筆予定。

４．今後の課題　　（注）必要なページ数をご使用ください。

現在の不動堂は享和 2 年の建築と判明しているが、宮殿の完成した年代は虹梁や木鼻の絵様などから様式的には 1700 年前後と推定される。現時点では棟札などの資料が確認されていないが、下重組物の通肘木に記された墨書は全文が読み取れないものの、「元禄 12 年 12 月」と推測できる箇所が確認でき、宮殿の建築年代を元禄 12 年(1699)とする確度は極めて高いと考えられる。

このように、大山寺宮殿は単体の建築として完結した構造で、もこしとも異なる上重・下重からなる二重屋根とするなど、全体として非常に技巧的なつくりになっている。しかも、正面 1 間の吹放しによる立体感、軒唐破風や千鳥破風による豪華さの演出、バリエーション豊かな彫刻及び彩色などに、近世建築らしい意匠表現が発揮されている。

一方、那古寺は、千葉県館山市に所在する真言宗寺院である。『那古寺観音堂保存修理工事報告書』によると、観音堂は享保 17 年(1732)の建築で、宮殿は天明元年(1781)に新造した。観音堂は、桁行 5 間、梁間 5 間、正面 1 間向拝付の 5 間仏堂で、内陣・外陣からなり、大山寺本堂とほぼ同型である。

近世の地域文化の発展や興隆を知る上で、庶民信仰としても広まった近世期の修験道・山岳信仰の様相を明らかにすることは重要な課題であるが、大山寺宮殿と那古寺宮殿が極めて近似した建築であることの意味を検証することも重要である。その関係性が大工や関係者の相互関係に基づいているのか、あるいはともに修験道で流布していた建築形式を採用したからなのか、解明すべき余地が残されている。今後、建築的価値・文化財価値の定まっていない大山寺宮殿・那古寺宮殿の評価により、近世における信仰の様相と文化の伝播を再認識することができる可能性がある。現時点では、大山寺宮殿の類例は那古寺宮殿にとどまっている。今後は、全国の近世建築の精査に努めるとともに、少なくとも千葉県内の近世建築をできる限り博捜して、大山寺宮殿の系統的な理解を深めることも課題である。